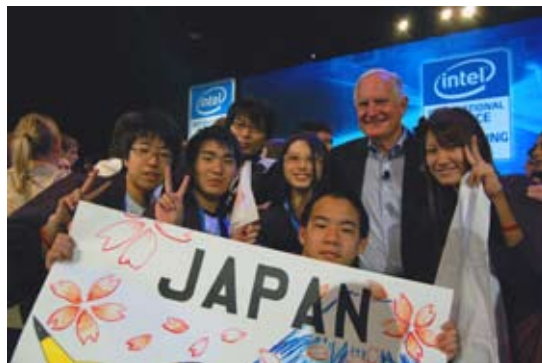


ISEF, JAPAN ALUMNI NEWSLETTER

NO. 15
JULY, 2008

日本代表が多数受賞！

ジョージア州アトランタにて開催されていた Intel ISEF(インテル国際学生科学フェア)において、坂口穂菜美さん(埼玉県立浦和第一女子高等学校3年)が動物科学部門で優秀賞2等賞(Second place, grand awards)を、吉村史也さん、谷口和成さん、清本大介さん(奈良県立王寺工業高等学校2年)が共同研究部門(エネルギー・輸送)で優秀賞2等賞(Second place, grand awards)を、三浦拳さん、井上真美さん、鈴木茉友さん(静岡県立浜松北高等学校3年)が共同研究部門(コンピューター



▲米Intel社CEOクレイグ・バレット氏とオープニングセレモニーにて

サイエンス)で優秀賞4等賞(Fourth place, grand awards)を受賞しました。また、牧野美咲さん(筑波大学理工学群化学類1年)がプラズマ科学連合賞1等賞(First place, Coalition for Plasma Science)を受賞し、浜松北高の三浦さんたちが、人工知能振興協会賞2等賞(Second place, Association for the Advancement of Artificial Intelligence)と国際計算機学会賞4等賞(Fourth Place, Association for Computing Machinery)を受賞しました。

NSS が日本代表の研究発表を支援

ISEF 日本同窓会が主体となって2004年に発足した、特定非営利活動法人(NPO)日本サイエンスサービス(NSS)が、今年も Intel ISEF に参加する日本代表の生徒達の支援活動を行いました。

Intel ISEF ファイナリスト研修会

3月26日から3月29日にかけて、インテル株式会社東京本社において、Intel ISEF 研修会が行われました。この中で、生徒達は発表のポイントを整理したり、英語の発表の準備や練習を行ったりと、各々の課題に取り組み、NSSのメンバーが科学的知見やIntel ISEFでの経験を生かし、その活動をサポートしました。研修会では、Intel ISEFの発表練習以外にも、過去の参加者によるIntel ISEF紹介のスライドや、ピンバッジ交換会の体験、研修終了後のパーティーなど、今年度の代表の生徒同士や、過去の参加者たちとの親睦を深める企画が行われました。これらの助けもあってか、最初は緊張気味だった生徒たちも、時間が経つにつれリラックスした雰囲気、積極的に研修に臨む姿が目立つようになりました。



NSSメンバーがIntel ISEFで代表生徒を支援

今年度は、柴田恭幸、早水悠登、奥山優衣の3名がプレスとして派遣され、現地での写真撮影や、メールによる速報配信、ISEF情報サイト(<http://www.isef.jp>)においてニュースリリースを行いました。また、読売新聞社からの依頼で、岩見綾花が日本学生科学賞の受賞生徒たちの生徒支援として同行しました。



発行：特定非営利活動(NPO)法人日本サイエンスサービス(NSS)

<http://nss.or.jp>

ISEF情報サイト

<http://isef.jp>

科学自由研究.info

<http://kenkyu.info>

編集：早水悠登・柴田恭幸(スタッフメンバー)

▼世界各国の高校生とピンバッジ交換をする三浦君



2007年12月、日本学生科学賞¹中央審査で読売理工学院賞を受賞しました。これ以後は学校の行事でも頑張っただけのまま受験だと思っていたところ、Intel ISEF 派遣候補として名前が呼ばれました。もちろん嬉しかったし行くのは楽しみでしたが、研究の完成度を高める必要があることは自分でもわかっていたので、5月のIntel ISEF まではアブストラクトやパネルの制作だけでなく研究も続けて、結局最後は発表練習する時間がほとんどなく出発を迎えました。

ISEF が始まると毎日がお祭り騒ぎでした。ピンバッジ交換会ではプエルトリコのカエルばかりが増えるなか、LED で光るバッジが欲しくて交換していました。やたらかっこいいオープニングセレモニーはあるし、水族館とコココーラは貸し切ってるし、自分たちはなんてすごい大会のファイナリストに選ばれたことだろうと思いました。ただ、一週間を後から全体的に振り返って、もっと積極的になれていたら、と思いました。ダンスパーティーがありました。まったく見ず知らずの人たちの中に割り込んで行って相手を見つけて踊るなんてこと普通の日本人はできないはず（例外もいたようですが）。日本の大会でももっといろいろな角度で交流する場を持つべきだと思いました。そして、英語は大切だということ。日本人は他のアジア人と比べても英会話ができないと思います。英会話がもっとできれば、比べ物にならないくらいこの一週間を楽しめたと感じます。

実はパネルが崩落してバイオレーションに引っかかり、急遽その場で段ボールのようなものを使って台を手作りし、時間ぎりぎりまで間に合わせたということもあり

ましたが、なんとか無事に審査の日を迎えました。が、初日の夜に通訳の Jeff とやった発表練習のせいで声がほとんど出ませんでした。しかし、なんとか根性と気合で相手に伝えたいことは伝えられたと思います。どの審査員にも研究の意義は必ず聞かれました。研究の成果、利用価値を重視してもらえるのは、この大会では私たちが学生としてではなく、研究者やエンジニアとして評価されるからだと思います。

特別賞は実はとれるかなとは思っていましたが、グランドアワードで名前が呼ばれた時には驚きました。結局、周りのブースを見渡して他の研究がすごいのなら、そんな大会に出られた自分の研究もすごいのです。自分の研究に自信を持って、ビジネスだと思ってその価値を相手に売り込むつもりで伝えるのが大切だと、結果的に入賞できてわかりました。

私は、この大会で世界中のファイナリストたちと出会い、高校生でもやろうと思えばなんだってできるし、成果も出せるのだと思いました。これから国内大会の入賞や Intel ISEF 出場を目指す人たちは、高校生という立場を忘れて科学者やエンジニアの一員として研究をしてもらいたいです。科学を軸に世界中の人と出会い、将来の夢である、起業して科学の最先端で仕事をするというビジョンが明確になってきました。いつかこの大会で出会った人たちとともに科学を発展させていく将来が楽しみです。



△一般公開の日に、はっぴと着物で日本をアピール

1 日本学生科学賞 (JSSA): 読売新聞社主催の科学自由研究コンテスト

小さな疑問を抱いてから1年・・・

埼玉県立浦和第一女子高等学校 坂口穂菜美



△受賞後の記念撮影で笑顔の坂口さん

私は Intel ISEF に出場することができるなんて夢にも思っていなかったので、最初は信じられませんでした。

Intel ISEF に行く前は、英語でうまく研究内容を伝えられるか、不安でいっぱいでした。単語一つ英語にするのにも様々な言い方があって、言葉の壁に何度も何度もぶつかりました。そして、練習はしたものの英語に対する不安が残ったまま出発の日を迎えました。

アトランタに到着してすぐに、ピンバッジ交換がありました。勇気を出して外国の方ばかりの集団の中に入ると、みんな笑顔で明るく声をかけてくれました。その瞬間、緊張や不安は消え去り、いつの間にか自分から声をかけ、写真を撮りまくっていました！「I'm from Japan.」というだけで人が集まってきて、あっという間に持ってきたピンすべてを交換していました！笑 交換したピンは一生の宝物です☆

審査会場に入ると、世界の研究レベルの高さに驚きました。私の研究が世界に通用するのか・・・とすごく不安になりました。しかし、私が味わった感動、研究のおもしろいところを伝えたい！という強い気持ちだけがありました。そんな中、審査員にあなたの研究おもしろ

いですね！と言われたときは、涙が出そうなくらい嬉しかったです。伝えたいという思いがあれば伝わるとわかり、とても自信につながりました。そして、言葉や文化は違って、科学のおもしろさは世界共通であることを実感しました。

一般公開の日、ゆかたを着て歩いているだけで写真を撮られ、ブースにはすごい数の人が殺到・・・1日アイドル気分でした！笑（日本では絶対ありえません！）また、小学生が私の研究を熱心に聞き、質問もしてくれました。科学に対する関心の高さに驚き、さらに私（相手から見れば外国人！）になるべく簡単な言葉で話してくれる優しさに感動しました。

Grand award の発表で名前が呼ばれた時、とても驚きました。まさか呼ばれるとは思っていなかったのですが、思わず幼虫の人形を持ったままステージへ！！ステージの上にいる間、ずっと今までのことを振り返っていました。そして、ここに私がいられるのは、たくさんの方々の支えがあったからだと思いました。受賞が信じられない気持ちと研究が伝わった嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいになりました。

このような一生で一度の素晴らしい体験ができて、とても幸せでした。とくに、研究や大会を通して出会うことのできた方々と過ごした時間は、一生の思い出です。その出会い一つ一つが私を大きく成長させてくれました。私は将来、この体験を活かして、たくさんの人に科学の楽しさを伝えられるような人になりたいです。そして、いつまでも小さな疑問を解決しようとする心を持ち続けたいです。



△浴衣とチマチョゴリで国際交流



Intel ISEF 体験記

早稲田大学高等学院 小原慶太郎

とんでもないことになってしまった、というのがアトランタの空港に降り立って第1の感想。さてどうしたものか、というのが第2の感想。

そんな Intel ISEF はわたしにとって怒涛の一週間でした。逆にその中で自分を組み立て直すことが出来た貴重な一週間でもありました。そして自分にとっての科学の意味を問い直すという点においても。

細かい部分をざっと振り返ると、まず周りの人たちを見て思ったことは、科学には国籍も年齢も関係ないということ。科学はそれを信じる人たちにとっての共通言語であり、共通の宗教であるということに改めて感じました。そして参加者の誰しもうも、自分の力で世界を変えたいと願っていることを実感しました。これは日本にいてもなかなか見えてこない部分です。閉会式でどなたか忘れてしまいましたが、女の子がこう言っていました。

「The world depends on your engineering」。その言葉がまさにその通りだ、と思わせるだけのパワーと能力が彼らにはありました。

次に思ったことは、参加者の中には科学を一種の玩具のようにして楽しんでいる人と、人や世界を助けるための手段としてとらえている人がいるということです。まあ、1000人近くいるのだから色々いて当たり前だろうと思うかも知れませんが、これは重要な事だと思います。科学というその響きだけで幸せになれるのか？それとも必ずしもそれが自身の幸せとは限らないと感ずるのか？これは今後、科学者や技術者になろうとするであろう私たちにとって、大きな問題じゃないのかと思いました。まあ、それをみんなに聞いて回れば良かったのですが、言葉の壁はそれ以前に大きい…ということも学びました。

総じて極めて私的な事を言えば、結構のうのうと暮らしてもいられないなあと思いました。世界が科学者の名を語ろうとする人間に課す問題は私の想像以上に大き

く重いものでした。今の私にとっては課されたというより科されたといっても過言ではないほどに。まあ、要するにまだまだ修行が足りないし、考えも足りないね。といった感じです。それを深く実感できただけでも本当に価値ある旅でした。出発前に、Intel社で合宿をした際に、多くの先輩方にお世話になりました。その時、Intel ISEFを体験した人たち独特のオーラ(?)みたいなものを感じて、自分も行って帰ってくればこんなになれるのだろうかとは半ば期待していたのですが、それは大きな間違いでした。帰ってきて各々が感じたことに向かって努力をして初めてあなるのだということにまざまざと見せつけられた気分でした。確かに ISEF は人生観を変えるかもしれませんが、その人のステータスまでも変えはしないということでしょうか。それすら知らずによく行ってきたもんだと帰国後思ったりもしましたが…

私的な話はお終い。

最後に一緒に行った方々、特に友達(と呼んでももう大丈夫でしょう?)に改めてお礼を言いたいと思います。ありがとうございました。それとまたお会いできる日を楽しみにしています。

▼自分の研究を説明する小原君



アトランタにホームシック中です

渋谷教育学園幕張高等学校 牧野美咲

Intel ISEF での経験はとても言葉では言い尽くせません。アトランタでの日々を思い起こすと、まるで夢でも見ていたかのような気持ちになります。笑いあり感動あり、そして涙あり。本当にたくさんのことを学ばせていただきました。特に私が一番学んだことは、「笑顔」と「自信を持つ」ことです。

私は自分に自信が持てず、プレゼン練習のときに笑顔を出せませんでした。自信が持てない理由は簡単で、大学生活という新しい環境の下で Intel ISEF に向けての準備が十分にできていないと感じていたからです。寮に住むことになり、インターネットが使えない、FAXがないという危機的状況でポスター完成が渡米の2日前に終わるというありさまでした。準備が滞ってしまったということから自信が持てず、様々な人から「笑顔を忘れないことが大事だよ」とアドバイスを受けたのですが、練習のときはどうしても笑顔で発表できなかったのです。「私の研究なんて、ポスターなんてダメだ」と何度も思いました。しかし、そんな気持ちを一扫してくれたのはブース作りのときに知り合った女の子の一言でした。「あなたのポスター素敵ね！写真撮らせてくれる？」私はとっさに英語が思いつかず、身振り手振りで笑いながら「もちろん！」と答えました。そうすると彼女も笑ってくれました。この会話で私ははっと気づいたのです。「せっかく I S E F の地に立つことができたのだから、もっと自信を持たなくちゃ。笑顔があれば大丈夫なんだ。」その気持ちで審査当日にのぞみ、とても楽しくプレゼンを



受賞し壇上で笑顔の牧野さん▲

できました。信じられないことに、台本なしで英語のプレゼンがすらすら口から出てくるほどでした。笑顔があればどんなことだってできる。今回このことをとても学びました。

そして、自信を持つこと。私は Special Award で賞を頂きました。賞を下さった方は、審査のときに何

度も私のブースに来てくださった方でした。専門家の方に認めて頂けて、私は本当に嬉しかったです。しかし、翌日の Grand Award で賞を取れなかったときは悔しくて大泣きしてしまいました。そのとき私を救ってくれたのはあのポスターのことを言ってくれた女の子でした。「あなたの研究は専門家に認めてもらえることが一番素晴らしいことなのよ。だから泣かないで！」泣かないでと言ってくれたのですが、その言葉に感動してまた大泣きしてしまいました。と同時に、異国の地で異国の友達とこんなに通じ合っているという事実感動しました。

この体験記も終盤に差し掛かってきましたが、やっぱり書ききれませんね。ISEF で私はたくさんの宝物を見つけました。笑顔と自信を持つこと、そしてかけがえのない人との繋がりです。読売の須賀さん、有里さん、N S S の先輩方、通訳でお世話になったジェフさん、トミーさん、安栄さん。ファイナリストのみんな、そしてアトランタで出会った全ての人へ！

I love you!! みんな愛してる！



▲仲良くなった友達に励まされる牧野さん





Intel ISEF 感想文

奈良県立王寺工業高等学校 吉村史也

自分は Intel ISEF に参加して沢山の貴重な体験が出来ました。

J S E C¹で科学技術政策担当大臣賞を頂き、アメリカ行きが決まってからの日々は大変でした。自分は全然英語が出来ないので本当に大変でした。プレゼンの英文を作ったり、論文を英訳してデータの信憑性を高めるために取り直したり、英語が出来ないからプレゼンの英文を丸々覚えるなど辛い日々でした。しかし、そんな時間はあっという間に過ぎて行き気づけば、もうすぐ出発の日、そんな時に顧問の先生の体調が悪化して一緒に行けない事になり、すごく不安になりました。そのような中アメリカに行きました。実際に体験すると楽しいものでした。向こうに着いてすぐのピンバッチ交換では、訳の分からない英語に悪戦苦闘して何とか乗り切りました。また、私達は審査会の日までまだ時間が有ったので、ずっとプレゼンの練習をしていました。途中、ノーベル賞を貰った人達の話聞く機会が有りましたが、「英語が分からないのに聞いても仕方がない」と言うことで、練習をしていました(笑) そうして審査の日が来ました。自分達の英語がきちんと伝わり、分かって貰えるかどうか

1 JSEC: 朝日新聞社主催の科学自由研究コンテスト

か心配でした。そして審査が始まり、質疑応答は通訳さんに任せっぱなしでしたがプレゼンが上手く伝わり、パフォーマンスがうけた時は物凄く嬉しかったです。次の日の特別賞の授賞式では何か貰えるかなと期待していましたが何も無く、少し落ち込みました。そうして次の日のグランドアワードの授賞式では緊張しながらも、過去に先輩が三位を貰っているので「2位以上来い!!」と、心の中で思っていました。そして三位の発表が終わり2位の発表が始まり、このまま何も来ないかもしれない不安が襲って来ました。そんな事を考えていたら名前を呼ばれました。正直に自分達の研究が高い評価されて物凄く嬉しかったです。自分はこの Intel ISEF に参加したことは一生忘れられない、そしてこの経験は自分の人生を大きく変えた出来事だと思います。最後に今回の旅でお世話になった朝日新聞社の皆様、N S S の皆様、先輩の皆様、そして何より顧問の先生方、ありがとうございました。



▲展示ブースの前で(左から清元君、谷口君、吉村君)



Intel ISEF に参加して

奈良県立王寺工業高等学校 谷口和成

こんにちは、王寺工業の谷口です。私たちは、JSECで科学技術政策担当大臣賞という賞を受賞しました。それだけでもビックリしていたのに今度は世界大会に出られると聞いてうまく私たちの研究を伝えられるかとても心配でした。私は英語がとても苦手なのでうまくプレゼンできるように何回も練習をしました。そして実際にプレゼンをして、審査員の方がうなずいて聞いてくれたときはとても嬉しかったです。アメリカについてまずピンバッチ交換会というのがありました。そこでビックリしたことがあります。私は科学者というのはとても真面目な人ばかりだと思っていました。ですが実際は全員とてもフレンドリーだったので、とてもビックリしました。そして次の日からブースのセッティングなどをしました。そのときにほかのブースを見て回りました。するととても難しい研究ばかりで、私たちは絶対にグランド

アワードの賞をとる気でいたのですが、本当に賞がとれるかなあ、ととても不安になりました。そして本審査が行われて次の日に一般公開とスペシャルアワード(企業賞)の発表がありました。そこで1つも賞をとれなくて、本当にグランドアワードが取れるのかとても不安でした。そしていよいよ次の日はグランドアワードの授賞式でした。まず初めに4位が発表されました、私たちの名前は呼ばれませんでした。そして次に3位が発表されました。3位も呼ばれませんでした。このころには心臓が爆発するくらい緊張していました。そして2位が発表されました。そこでついに「NARA JAPAN」と呼ばれたときは死ぬほど嬉しかったです。私たちが夜遅くまでがんばってきた研究が世界の人たちに認められたような気がして自然と少しだけ涙が出ました。そして表彰式が終わった後に自分たちのブースを片づけているとほ

かの国の人たちが「Congratulations!」と言ってくれてとても嬉しかったです。私はこの Intel ISEF2008 に参加してよかったと思いました。世界にはこんなにすごい研究をしている人がこんなにたくさん居るなんてとても驚きました。自分の持っていた世界観が変わったと思います。また、ブースのセッティングなどでいろいろ手伝ってくださ



▲二等賞を受賞し満面の笑みの王子工業の3人

た人にお礼がいたいと思います。今回2位がとれたのもほかの人たちが支えてくれたおかげだと思います。これからは、もっとこの Intel ISEF をもっとメジャーな大会にしていきたいと思いました。これからも、もっと素晴らしい研究をして、日本の技術を高めていきたいと思いました。そしてもう1度 Intel ISEF に出場したいと思いました。



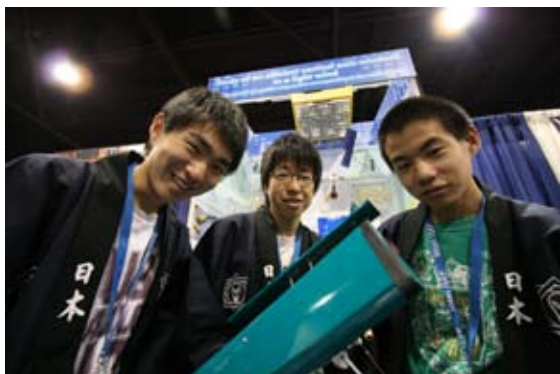
Intel ISEF の感想

奈良県立王寺工業高等学校 清本大介

今回、Intel ISEF に日本代表として参加していろいろな経験ができました。僕が Intel ISEF に参加することが決まったのは3月に入ってすぐ、部活の3年生の先輩方と卒業の打ち上げに行ったことでした。顧問の先生が JESC にでた先輩の代わりにの人を探していて、その日の朝すぐに声をかけられました。最初は「自分には無理だ。」とずっと断っていたのですが、その日の午後「もう申し込んだぞ。」と嘘をつかれ、そのときは驚き「じゃあやります。」とやけくそになってしまいました。その日から地獄のような日々が続きました。

東京での研修でも、他の2人と違い日本語もうまく話せないまま参加してすごく苦労しました。東京から帰ってきてからも大変でした。データを詳しく取ったり、英語の練習をしたり毎日が苦痛でした。そして、ISEF まであと少しに迫った日に、先生が体調を崩して一緒に行けないと聞いてとても落ち込みました。すぐに、代わりに先生をみつけて一緒に行くことになりました。

奈良からの出発はとても早く、空港に着いたときには



▲自作の風車模型を手に、ブース前で

とても眠かったのに飛行機に乗ると緊張で眠れませんでした。アトランタに着くと日本とは違う環境に戸惑いました。しかも、初日からピンバッチ交換で周りの空気についていけず次々と声をかけられすぎて困りました。でも、女性陣はどんどん自分から交換しに行ったり、とても羨ましく思いました。

二日目には、ブースセッティングと開会式がありました。会場はとても広くこんなところで本当にプレゼンができるのか不安になりました。開会式では日本のポスターを持って壇上に上がらせてもらい、良い経験をさせてもらいました。

審査当日はまったく先が予想できず「なるようになるか。」という気持ちでした。やはり向こうの方の英語は聞き取りにくく、通訳に頼りがちになることがありましたが、午後からは、企業の方にもプレゼンを聞いてもらい結構イケたんじゃなかなと思いました。

ISEF で出会った各国の人や現地の人と交流する中で一番必要だと思ったのは、共通して分かり合える英語を話すということです。また逆に、英語が話せなくてもオープンに他人とコミュニケーションをとることで

今回、二位という良い賞を受賞できたのも周りで支えてくれたたくさんの方々のおかげです。今度は、僕自身がこの経験を活かし、周りの人やこれから出会うたくさんの人たちと支え合いながらオープンに生きていきたいです。



Intel ISEF 体験記

京都市立堀川高等学校 町出明敬

Intel ISEF—それは私にとって、未知なる世界でした。日本に帰国してから、もうすでに数週間が経とうとしています。今でもなお、Intel ISEF での体験が鮮明に思い出されます。

今回は、アメリカに行くまでのことを回顧しつつ、ISEF で得た素晴らしい体験について綴ってみようと思います。

もう1年半くらい前のことになるでしょうか。1年の5月ぐらいからしていた湖に関するグループ研究を終え、個人研究を始めました。その時点では、コンクールなどに自分の研究を出すことは全く考えていなかったのですが、研究が進むにつれてコンクールや発表会に出場するようになりました。そこで私は“自分の研究を人に伝える楽しさ”を味わったと思います。そして、最後に出場したJSECでグランドアワードをとることができ、ISEFに出場する貴重なチャンスを得ました。それからアメリカ渡航までの間、準備に追われていた忙しい日々も今ではいい思い出です。

月日はすぐさま過ぎ去り、いよいよアメリカへの旅立ちの日。最初は期待と不安で胸が張り裂けそうでしたが、いざアメリカへ到着するとピンバッチ交換会やオープニングセレモニーなどの盛大な催し物がたくさんあり、改めてISEFの規模の大きさと世界の高校生の熱気を感じました。世界中の高校生と交流し、研究の話をするなどの国境を越えたコミュニケーションができるということもISEFの大きな魅力の一つではないでしょ

うか。そのような交流は、本当に一つ一つが全て“楽しかった”の一言で済ますのは惜しいくらい満足のいくものでした。

そして審査会の日。今までコンクールなどで緊張をしたことがあまりなかったのですが、その時ばかりはさすがに緊張を感じました。いざ審査が始まると、何度も言葉を詰まらせたりもしましたが、審査員の方々は本当に真剣に発表を聞いてくださり、緊張感が吹っ飛びました。また、発表を終えたあとに誉めていただいたり、大学の先生からは大学へのお誘いやパンフレットをいただいたりなどしたときは素直に嬉しかったです。たとえば拙い英語の発表でも、伝えたい・理解してもらいたいという強い気持ちがあれば伝わるのだとわかりました。結局、受賞をすることはできませんでしたが、後悔の念や悔しい気持ちなどは一切ありません。むしろ、自分があるような大きな国際大会に出場できただけでも大満足です。授賞式が終わったあと、1年半ほどの研究をしてきた日々を思い出し、感慨無量になって涙が止まらなくなりました。個人研究で一人で悩むことも多々ありましたが、いつも誰かに支えられていたことに気付くこともできました。様々なことを教えてくれた先生、一緒に頑張ってきた学校の友人、そしてISEF出場までの期間、あらゆる面でサポートしてくださったNSSの皆様には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。これからはISEFで得た貴重な経験を糧に、新しい道を切り拓いていきたいと思います。



▲ピンバッチ交換をする町出さん



Intel ISEF という場所

岩見綾花 (55th ISEF 参加、筑波大学)

ファイナリストとして Intel ISEF に参加してから 4 年、私の元に思いもよらない話が舞い込んできた。

「岩見さん、今年、サポートスタッフで ISEF 行かない？」

ところがその話を受けると同時に私は大きな壁にぶち当たった。なぜなら私は英語が堪能なわけでも、研究を指導できるほどの科学的知識があるわけでもなく、Intel ISEF にサポートとして行く事も初めてで、昨年までサポートスタッフとして尽力していた N S S スタッフとは、まるで違ったからだ。ファイナリストにどんなサポートが出来るのか、逆に、ファイナリストに不安を与えてしまっているのではないかという思いばかりが浮かび、Intel ISEF で何をすればいいのか、と悩み続けた。

ISEF が始まってから問題だったのは、英語や知識だけではなかった。ファイナリストそれぞれに感情移入し過ぎてしまい、全く客観的に見ることが出来なかったからだ。一つ一つファイナリストと一緒にってはしゃぎ、驚き、感動し、どちらがサポートする側かわからないこともあったかもしれない。

しかしその一方で、気がついたこともあった。それは、教えたり知識を貸したりすることだけがサポートではないということだ。

彼らが目一杯 ISEF を楽しむために何が出来るのか、ISEF という大きな舞台を前に、ファイナリストだった自分ははどうしていただろうかと重ねて思い出した。

私には、研究を手伝うのに必死になってくれた後輩がいた。一人ではちっともはかどらない準備で一緒に悩んでくれた先輩がいた。英語が出来ないことや、海外に対する不安な気持ちを聞いてくれる先輩がいた。後輩と共に ISEF の舞台に立つことが出来なかった悔しさを、わかってくれる先輩がいた。賞を受賞して、一

緒に喜んでくれる仲間や先輩がいた。

この人達が、どれだけ私を支えてくれたか計り知れない。

確かに、英語や科学の知識はファイナリストのお手伝いをする上で、とても重要で必要なスキルだと思う。しかし、ISEF に参加しているとき一番心強く思えたのはそんなスキルではなく、共感し、話を聞いてもらうことだった。

今回サポートスタッフとして行く事で、ファイナリストとして ISEF に参加した者にしか出来ないことが、本当にたくさんあることを実感した。出来ないことが多い私だからこそできたこともあるのではないかと思うことができた。ISEF に参加しているファイナリストにとって最も心強いのは、不安や緊張、喜びや悔しさを一緒に感じてくれる人がいることではないだろうか。

4 年前の Intel ISEF では科学を楽しむことを知り、もっと多くの人にその気持ちを知ってもらいたいという想いが強くなった。今回は大切な気持ちを思い出し、自分にも出来ることがあることを知った。私にとって Intel ISEF とは、様々な想いに気づかせてくれる場所なのかも知れない。



▲坂口さん(左)の受賞を喜ぶ岩見さん(右)



輝きの場所で

奥山優衣 (慶應義塾大学)

こんなにも素晴らしい時が流れる場所は、他の何処に存在するだろうか。感動という言葉が陳腐に聞こえるほどの輝きが、そこには確かに存在した。

一週間、私がカメラに収め続けた被写体は、ごく普通の高校生たちだった。レンズを向けると決まってピースをするところや、免税店でとりあえず香水の匂いをかいでみるところはいかにも高校生という感じがして、自分の過去と照らせばびたり重なって見えた。しかし、彼らと私の間には決定的な違いがあった。私がかつて一度も持ったことのないものを、彼らはもれなく持っていたのだ。それは自信と誇りに満ちた、瞳の輝きである。

ISEF までの道程は、そう生易しいものではなかつただろう。それは審査前の緊張や、審査後の笑顔から容易に想像することができた。だが彼らは、それまでの苦勞を乗り越えた彼ら自身の努力に支えられているようだった。そして同じ努力を重ねてきた仲間の存在もまた、彼らの支えであつたようだ。仲間の受賞をハイタッ

チで祝福する姿や言語の壁を越えて励まし合う姿を前に、私の身体は幾度も震え、写真は見事にぶれた。

今後彼らがどんな目標に向かい、どんな道を歩んでいくのか、私は知らない。けれども彼らは確実に、前への一步を踏み出している。喜びに笑う時も悔しさに涙する時も、その瞳は眩と前を見据え、輝いていたのだから。ファインダー越しにその証人となれたことを私自身の財産とし、心から感謝したい。